

中国的養生

長岡大学教授 定方昭夫

【目次】

はじめに

第1章 鍼灸医学・易・「周易参同契」

第2章 「黄金の華の秘密」

第3章 気功・「神通自在」・「長生久視」

はじめに

筆者の専門はユング心理学であるが、ユング派の教育分析中の体験から「中国的養生」の世界と深いかかわりを持つに至った。ユングとユング心理学関連の翻訳・著作に携わることから中国的養生を研究テーマに掲げてきたので、その成果の一端を伝えておきたい。「研究ノート」とは言いながら、プライベートな部分が多いので、「極私的ノート」とするのが正しいかもしれない。

第1章 鍼灸医学・易・「周易参同契」

筆者が心理学を志したのは、中学1年のお正月に、当時日本心霊科学協会会長であった田中千代松氏の「第三の世界」をお年玉で買い求めて読み終わったときであった。大学での専門は当然超心理学に関係する心理学と決めていたものの、好きな英語に関係する英文科、なぜか中学校ごろから好きだった中国を研究する中国哲学科(二松学舎大学あたりを視野に入れていた)もいいかなと、漠然とあこがれてはいた。まあ一生やって生きたいわけだからと、東京都立大学の心理学科に入学。しかし超心理学という学問は心理学という既成のアカデミズムのなかではまったく相手にされない。せっかく入ったからと心理学の単位をとるのは最低限にして、独文・仏文・哲学の授業を聴きまくった。大学三年目にして当時倫理の非常勤講師として学習院大学からいらしていた湯浅泰雄先生と知り合うことができた。そのころ先生は「超心理学概説」の翻訳を出されたばかりで、同書がそれからの先生との長いお付き合いの縁を作ってくれたといってよい。その後先生の紹介で本山博先生(宗教心理学研究助長)の研究をお手伝いするようになった。本山先生はラインの学統を継ぎつつも生理心理学の手法を駆使して人間の謎に迫ろうとしていた。学部

卒業後、本山先生の奨めで東京教育大学院に入りポリグラフによる研究の道を歩んだ。インドのアンドラプラディシュ大学の客員教授として赴任される際にも助手として御供した。しかしどうも人間の心の秘密に迫るのにポリグラフというのは今ひとつ筆者には物足りなく(あるいは肌に合わなかったのか)方向転換を考えた。帰国直後に日本超心理学会の年次大会で講演をされた、ユング研究所から帰ってきたばかりの秋山さと子先生とお知り合いになることができた。結局修士論文は長島貞夫先生の指導により「箱庭療法の因子分析的研究」というものになった。このころ日本ではまだまだユング心理学はマイナーな分野で河合隼雄氏も帰国して少しずつ活躍を始めたころであった。修論を書き上げたところで、秋山先生から教育分析、つまりユングの考えを身をもって知ると、夢分析の実際を学ぶために自らが夢分析を受けることとなった。タイトルとのかかわりでいえば、この教育分析が「中国的養生」の世界とのきっかけを作ることとなった。夢分析を受けて1年目に、どうしても腰が痛くなってきた。それどころか左足がしびれてきたのには参った。「悪いところがあったらいけないから」と受診を進められ、知人の友人の紹介で某大学病院整形外科を受診した。レントゲン検査と種々の検査結果を見ながら教授いわく、「どこも悪くないね、気のせいだよ。」自分では気のせいだとわかってはいても、西洋医学的には打つ手なし。ほとんど参ったとき、ふとひらめいた。インドでおなかを壊したとき本山先生がお灸で治してくれたことを思い出した。早速東大前の高島堂薬局でもぐさを買って求め、後に師事することとなった間中義雄先生の「針灸の医学」を参照しながらひざ裏の押して痛い点(圧痛点、今思えば委中)にお灸をしたところ何と一発で痺れが取れたのにはびっくりして、鍼灸学校の入学試験を受けることとなった。いまさら専門学校でも、とは思ったが本山先生からの「いったらいいよ。」の一言で受験を決めた。ちょうど足がしびれていたころ、秋山先生に分析中「易」を立ててもらったら「水山けん」の卦が出てこれにもびっくり。「けん」とは「前に水、後ろに山があつてうまく進めない、足なえ」を意味し、そのときの筆者の状況そのものであった。それ以来「易」に取り憑かれることとなる。当時東京教育大学で宋易を講じられていた今井宇三郎先生、中央大から国士舘大に移られたばかりの漢易の鈴木由次郎先生の講筵に列することとなった。また当時上野の文化会館で月例会がもたれていた加藤大岳師(昭和の名易占家)の研究会にも顔を出すこととなった。ここに1つ特記すべきことがある。当時神田にあった明德出版社の2階にあった鈴木東洋学研究所に初めて秋山先生とお邪魔したとき、近々始める抄読会のテキストに秋山先生のご希望で「周易参同契」を鈴木先生が取り上げられたことである。同書はいわば内丹の書であつてユング派の秋山先生の興味をそそったものである。お忙しい秋山先生の代わり月1回神田に通うのが楽しみであった。「周易参同契」とはとっても周知のように鈴木先生のご専門の「易」とは違う、僭越ながら門外漢の筆者が大先生の読みの誤りを正したこともあつた。完全原稿を残すことなく惜しくも鈴木先生は亡くなられたが、今井先生が後を引き継いで原稿に手を入れられ、明德出版社から中国古典新書の一冊として出版されたことは斯界のためによかつたと思うものである。露伴の論考「仙書参同契」以来約三十年してわれわれは和訳で読めるのである。

第2章 「黄金の華の秘密」

さて針灸学校に通い易の勉強に専念しているうちに何とかユングの勉強を続けたいと思ってユング心理学に理解をお持ちの、上智大学の霜山先生(フランクルの「夜と霧」の訳者)の博士課程にいられた。

さて博士課程 3 年次の 6 月には一大イベントがあった。ユング生誕 100 年を記念して、スイス本国から日本のスイス大使館にユングの生涯を描いた写真をパネルにしたものが送られてきて、それを展示するとともにイベントを開催するように、とのことであった。上智大学教員であられたスイス人神父のインモース先生から霜山先生経由で、当時ユングの著作を独語で読む研究会を学内でやっていた筆者に声がかかり、仲間と共に大使館に協力することとなった。単なる展示では勿体ないので、秋山さと子、トマス・インモース、河合隼雄の 3 氏による講演会を企画したところ、時の流れもあってか会場が超満員になる程人が集まって文化大使のプフィスター氏にも大いに喜んでもらえたことが心に残っている。

秋のスイス政府留学生試験に無事受かって翌年 3 月博士課程満期退学後の 8 月にはチューリッヒ大学に通いつつユング研究所に留学、という予定が 5 月になって急にだめとなり、あわてて札幌学院大学の心理学専任教員の公募にアプライして無事そちらで採用となる。

同大文学部の間人科学科は新設のため、2 年近く赴任が先になったが、ちょうど新潟の会社付属の鍼灸治療院で札幌に行くまで働かないかという話があって、1 年 5 ヶ月程鍼灸師として働くことになった。それまで昭和の名鍼灸師として著名な澤田健氏の 2 番弟子（1 番弟子が代田文誌氏）といわれる中村了介先生の陪席を数年にわたってさせてもらったことがあって、その体験が励みとなって何とか臨床家としての務めが果たせた。このときのボーナスで「道蔵」を揃えることができたことは嬉しかった。

札幌学院大学時代は忙しい中、湯浅先生のお手伝いでユングとヴァイルヘルムの著作「黄金の華の秘密」の独訳を下訳した。湯浅先生が訳に寄せた「解説」は先生ご自身の研究にとってもターニング・ポイントになるもので力作である。「解説」には中国語訳（「黄金之華的秘密」楊儒賓訳、商鼎文化出版）もある。

第3章 気功・「神通自在」・「長生久視」

札幌学院大学には残念ながら 3 年間しか席をおかず、話のあった長岡短期大学の教職課程へと移った。しばらくして「気功」に関心を持った。前から「気」こそ、この宇宙を理解するキーコンセプトであるという信念のようなものを持っていたので、月 1 回当時本を出し始めていた T 師の会に参加すべく上京していたが、本格的に「気功」とかかわるようになったのは、日中友好 15 周年を記念して 1988 年に開催された「気と人間科学」のシンポジウムがきっかけである。大会責任者の湯浅先生の意を受けて、また丁度前年より関西気功協会代表として春秋の中国観気旅行を主宰していた津村喬氏の誘いもあり、3 月の観気旅行に参加させていただくチャンスももらった。湯浅先生が北京日本学中心に在任時知り合い、シンポジウムの件で筆者が打ち合わせをする相手である、王ろ生老師がちょうど観気旅行の受け入れ先でもあった。

この中国観気旅行が筆者にとって「気功」にのめりこむきっかけとなった。また湯浅先生の片腕として「気と人間科学」シンポジウムの約 1 週間事務局長としてお手伝いさせてもらったことは終生忘れられない体験となった。中国政府は当時最強といわれた厳新老師をはじめそうそうたる気功関係者を送ってきた。このシンポジウムが日本における気功ブームに一役買ったことは強調してもすぎることはない。このシンポジウムを契機に東洋医学・気功・特異機能（超常現象）を研究テーマとする「人体科学会」を設立することとなり、湯浅先生を中心としての集まりを頻繁にもち、設立まで約 2 年ほどかかった。

学会を作った当初は道教研究者として知られる若手の方々も参加されていたが、しばらくして学会を

離れた。後に道教学会でお会いした際の話では、「気」の科学研究というのがどうも、ということで学際研究の難しさを思い知らされた次第である。人体科学会には関西大学に長らく務められた坂出先生が熱心に顔を出され、ご専門の立場から「中国的養生」につき学会のみならず筆者に対しても有益なご助言をいただいたことをここに記す次第である。

人体科学会第 11 回大会で「露伴と養生」について発表した。内容は露伴著とされる「神通自在」についてである。露伴のことなら何でもご存知といわれる浦西和彦の編集した「露伴全集」（岩波書店）の別巻には、露伴の著作一覧が掲載されている。そこにある「易筋経解説」には△印があって編者未見の書である。実は同書は、正確には「神通自在」と題する「易筋経」の訳書であって、弟子の吉田正平の手になる。露伴は序文（1～6 頁）を寄せているのみであって著作というにはふさわしくない。同書は大正 9 年 4 月廣文堂書店より発行されており、1989 年 9 月にぐち書店より筆者の所蔵本より復刻・発行された。内容はいわば武術気功の本なので武術家であり、台湾系仙道に詳しい川瀬健一氏に解説をお願いした。実のところ「易筋経解説」が本当は「神通自在」であることをなんで知ったのか、まったく記憶にない。ただ長いこと同書を捜していた所、新潟の古書市の目録に載っていたので注文を出したところ、抽選で他の人に渡ったとのこと、出品した地元書店に聞いたら、神戸の人に当たったとのこと。実はその事があって数年後、気功関係のイベントで関西に行った際、神戸の後藤書店で同書を購入したのであった。執念というか縁があったということであろう。なお付記すれば、「神通自在」には新聞の書評（無署名）がある。若い方々の調査に任そう。

「露伴と養生」については語るべき多くのことがある筈なのだが、正直手持ちの材料が少ない。ただ幸田文女史によれば、「父はいつもこうして手で揉んでおりました。」と、露伴はいつも按摩功をしていたとのことなので、「露伴と養生」という大きなテーマにはまだまだ未発掘の鉱脈が残されている筈である。中国政府体育総局は気功の四大伝統功法の一つとして「易筋経」を世界に喧伝している。その意味でも露伴の先見性は高く評価すべきであろう。

「長生久視」は神田の叢文閣書店にて入手した。はじめ、手にとって買うべき価値があるものやらすぐには？であったが、じっくりたち読み始めたところ「これは！」という書だと了解でき、直ちに買い求めた。同書は北京週報を発行していた藤原暁星氏が北京の西にあった淡霞観という道観の主である道士とその妻との交流を描いたもので、大正 15 年極東新信社から発行された。おそらく続きがあるものにとらんで国会図書館で雑誌掲載の残りの文章を見つけ、コピーをとり、たにぐち書店より復刻したものである。中国にもご一緒させてもらったことのある陳舜臣先生から序文を頂き、筆者が解説をつけた。同書を三浦國雄先生に贈呈したところ、偽書の疑いありとのコメントをいただいた。その後、お年を召した中国人気功師より、確かに「淡霞観」という道観が存在したと伺ったので、偽書という疑いは晴れることと思う。同書には道士夫妻が瀬戸内にある藤原氏の実家に滞在されたとあるので、「極東新信社・藤原暁星」を頼りに調査されれば、あるいは道士夫妻と藤原氏の記念写真が存在するかもしれない。この調査も若い研究者にお任せしよう。

同書の価値は道教という古い中国の民間宗教に新風を吹き込もうとされる道士夫妻の爽やかな取り組みにあると思う。ジャーナリスト藤原氏の筆もさることながら、単なる民族宗教としての道教を超える契機がそこには認められると筆者は感じている。

道教研究誌「東方宗教」を 1 号から最近の 109 号まで縦覧してみても、正直生きた宗教としての道教

の姿が感じられない。第3次中国観気旅行から第20次まで延べ15回の旅行に参加して中国各地の聖地をお参りする機会があった。幸い道教の神様方と交感する得がたい体験を何度も味わった。日々少しは気功を続けていた甲斐があったというものである。そのような立場から見ると、今の道教研究には血が通っていないような気がしてならない。単なる過去の遺物としての道教が研究対象になっていないか？「神作って魂入れず」の研究では本当の道教研究にはなっていないのではないだろうか。宗教を研究するとはどういうことか、内在的研究はどうあるべきか、といったテーマを方法論的に厳密に論ずる、というには今の筆者にはその用意が全くない。また「道蔵」を読みこなすといった漢文の素養もなく、文献研究の手ほどきも全く受けていない。

しかし鍼灸・気功・本草・中華料理といった「中国的養生」の実践の世界に長らく身をおいてきた者として、「道教」の可能性をつらつら考えてみるに、道教の潜在力の一面として長らく培ってきた養生の知恵がこれからの世界に大いに必要になるのではないだろうか。

その方面ではわれわれは既に石田秀実・坂出祥伸・三浦國雄といった優れた先達を有している。それに続く若い中堅の研究者もあるいはおられるかも知れず、関連学会ならびに研究者の方々ともあまりお付き合いの深くない筆者のこととて的外れの発言かもしれない。しかし、ここはやはり中国学研究者の端くれの一人としていっておきたい。

筆者は確かユング心理学研究者のはずでは、という声が聞こえてきそうなので一言弁明の必要があろう。もう何年も前にユネスコの依頼で（財）東洋文庫が日本人で中国を専門とする研究者の英文のディレクトリーを作ることになったので、筆者にも登録するようにとの連絡があった。キャリアからいえばとてもことに専門の方々と一緒に名を連ねるのは恐ろしいことであったが、ありがたくその榮に浴することとした。ということで、心理学畑出身の筆者にもこのテーマに関する発言権を与えていただくこととする。これから述べることは決して先人の業績にけちをつけようというものではない。如何に道教研究における養生面がおろそかにされているかを嘆くだけのことである。

「道教関係文献総覧」（風響社）を覗いたことがおありであろうか？

ここでは「易」については触れまい。とりあえず養生分野についてみれば、疎漏さ加減が見えてくる。道教そのものに関する研究の博搜についてはおそらく問題がないと思われる。しかし、「氣と養生」「医薬」については、その分野の専門家の協力を仰ぐべきではなかったろうか？

30年程「中国的養生」の分野の多くの書に目を通してきた者としては、「総覧」における「中国的養生」関連の文献がぼろぼろ抜け落ちているのには、なんとも目をおおわしむるものがある。

これは何も編者に責めを負わすべきではないのであろう。単なる経典・儀礼・歴史等の外在的研究が道教研究の本道と思わしめる方法論がそうさせたものと思って間違いのないであろう。宗教研究にはいろいろな光の当て方がある。光を当てる向きによってさまざまな側面が見えてこよう。教理研究にも意味はある。しかし道教は過去の遺物ではない。道士が、道観が、そして道教の神々がおられる。そして八仙もおられる、この20世紀の北京に「黄金の華の秘密」の筆者呂祖師が現れたと中国人気功師から伺った。その意味では道教は生きているのである。

筆者が関わってきた「養生」の分野というのは、思い起こせば「方技」というものであって、謂わば筆者は方技の輩というもので、一昔前は社会的政治的にその地位は低いものであったろう。筆者は半ばまじめに、半ば冗談に自分の前世は方士だったと思う、ただし皇帝づきのね、と公言している。ここは「方

士の戯言」と聞き流していただいて結構なのだが、やはり養生という分野にもっともっと目を注いでほしいのである。

例えば佐藤一斎の「言志四録」の一節に読書の後は「中かん」（胃に関係するツボ）に鍼をするとある。ある訳者は鍼をするような気持ちでと訳しているが、ここはやはり読書に頭を使った後なので、頭に上った血を鍼をすることで下げることが必要なのである。「学んで思うこと」は胃の気を大変損なうのである。いつからそのような養生の知恵が忘れられたのであろうか。この一事をもってしても読書人のたしなみとしての養生の重要性がお分かりいただけるのではないだろうか？

筆者自身の養生の分野の実践的研究はまだまだ終わったわけではない。更なる研究のたびに続くかと思うとワクワクしてくる。以上書き連ねてきたことはその途中で見てきたものを同行の仲間と分かち合いたいがための「極私的ノート」の1頁と読み流していただければと思う。

追記：①ユング心理学では人間の心のあり方を理解する材料として「昔話」を大事にする。筆者は中国昔話関連の翻訳・著作を百冊以上集書してきた。少し前その方面の専門家により「中国昔話翻訳書誌」が発行されたが、小生のささやかな蔵書から見ていささかの補正すべき箇所があった。つついサボっているが、いずれ編者に伝えたく思っている。

②縁があってチベット密教も筆者の研究対象となった。「ユングとチベット密教」なる訳書も友人の手を借りて、ピング・ネット・プレスより刊行した。ここは中国を論ずる場所なのでこれ以上触れないが、「ユング心理学とゾクテン」については語るべきことがある。別の機会としよう。